漱石と〈則天去私〉

石崎等

漱石の晩年の文学と思想、ことに『明暗』と〈則天去私〉との関係を考察しようとするとき、芥川龍之介がいささか辛辣な意味をこめて語った〈老辣無双〉という形容とともに、久米正雄の「漱石先生に初めて会うた時、壮年時代の、書棚を前にして髭をぴんと刎ねかした写真に、強い印象を作つてゐた自分の眼は、先生も齢を取られたなと思つた。実際先生の顔は、五十にしては老け過ぎてゐる。併し話を窺つてゐる中に、吾々は直ぐこの割合に老けた先生の顔の中に、『永久の青年』の輝きを見出す。それが燦々と閃き出る時、先生と自分たちとの間には、不思議に年齢の溝渠がなくなる。――自分は屢々この事を経験した」(「夏目漱石氏の印象」)*ということばを想起する。漱石が芥川や久米ら若い文学者と交渉を持ったのは、最晩年の約一年に過ぎないが、久米の語る〈永久の青年〉というイメージは、えてして〈則天去私〉を悟達的な人生観・宗教的な到達点と祭り上げて解釈してしまいがちな一般的趨勢の中にあって、決して誇張ではないし、また虚像であり過ぎるものとは思われない。ただ〈老辣無双〉にしろ〈永久の青年〉にしろ、これら若い世代の目に映じた印象だけをもって〈則天去私〉をめぐる厖大な解釈の累積を突き崩すには資料的にみても不充分なものであろう。巷間、〈則天去私〉という標語は、文学者漱石の晩年の肖像を描くために必要な重々しい衣裳と見做されているが、たとえそれが文学ならびに人生に対するどのような衣裳であるにせよ――いままで肯定・否定、あるいは積極的・消極的な立場からさまざまに論及されてきたが――、久米や芥川の印象をも含めて、もう一度、残された証言や資料を虚心かつ冷静に読むことから始めなくてはならないであろう。それぞれの客観性と真実性を問い正当に位置づけること――そういう地味な作業を通してしかわれわれは〈則天去私〉の呪縛からは永久に解放されないのではないか。戦後、江藤淳によって書かれた『夏目漱石』、特に第一章「漱石神話と『則天去私』」は、その果敢な試みであった。しかしそれから二十年の歳月が経た今日、圧倒的な隆盛を誇る漱石研究史上、微妙な形で〈則天去私〉評価の変動が見受けられる。私はその現象を必らずしも風化とは考えないが、安易な解釈や主張をみると、問題はやはり残された証言や資料の厳

密な検討ならびにその位置づけ、つまり〈則天去私〉成立史の検証が不充分かつ不徹底であったのではなかったかと思われる。〈則天去私〉の神話を盲信しているかぎり、〈老辣無双〉や〈永久の青年〉が漱石の実像を形成する重要な一要素であるという事実が見えてこない。神話の盲信は気楽なことである。しかも客観的な追求を放棄して真実の追尋を断念することは、漱石像を結ばせるのを容易にする。しかしそれが虚像でしかないことも見易い。漱石にとって〈則天去私〉とは何であったのか、まずその点からみていくことにする。

＊『人間雑話』（〈随筆感想叢書8〉大11・10・25　金星堂）

＊

〈則天去私〉のことを考えようとするときつねに思い浮かぶひとつのエピソードがある。それは或るデパートで催された古書即売会のカタログでみた横書きの〈則天去私〉のことである。もちろんその揮毫は、素人眼にみても偽書であることは明白なのだが、たしかかなり高額な値がついていた。ニセモノに対する厭な感じをいだかされるとともに、〈則天去私〉の四文字がいかに神秘性・伝説のまといついたものであるかを強く印象づけられた。もちろん研究家の間で話題となり論議されることはなかった。

ところで、近年〈則天去私〉四文字の揮毫の初出が、日本文章学院編『文章日記』〈大正六年版〉（大5・11・20　新潮社）であることが古川久氏によって判明した。管見によれば、揮毫時期の推定については考察されても、それが公けにされたルーツを極めたのは最初ではないかと思われる。*同じ〈天〉が用いられてはいても、漱石四十一歳の時の〈不見萬里道　但見萬里天〉**にみられる茫洋とした南画的な自然の世界にくらべるとはるかに人倫的な色合いが濃い。すでに〈則天去私〉の揮毫については、赤木桁平の『夏目漱石』（大6・5・28　新潮社）の表紙に〈漱石〉の署名を右下から左下に移し変えて印刷されているのを先駆として、松岡譲の『漱石先生』（昭9・11・20　岩波書店）の中に写真で紹介されてはいたが、その初出となるといままで不明確であった。中島国彦氏が指摘している***ように、この四文字が漱石全集に初めて収録されたのは、驚くべきことに、昭和五十一年三月九日発行の『漱石全集・昭和四十年版補遺』（岩波書店）からである。単なる揮毫としてではなく、正式に漱石の表現として定着をみたわけである。古川氏の注解をそのまま引いてみる。

『大正六年　文章日記』の一月の扉に掲げてあり、同書に無署名の「十二名家文章坐右銘解説」というが添えられ、「天に則り私を去ると訓む。天は自然である、自然に従うて、私、即ち小主観小技巧を去れといふ意で、文章はあくまで自然なれ、天真流露なれ、といふ意である」と記されている。これは恐らく漱石の揮毫として絶筆で、その日記は没する約二十日前の刊行であるから、漱石の目にふれているものと思われる。

現在、〈則天去私〉は、漱石晩年の思想表現として重視されているが、もしこのように啓蒙的な意味を帯びた〈文章坐右銘〉として書かれたも

のであるなら、古川氏によるこの発見は研究史上重要な問題を提起している。尤も第一等の資料である＜解説＞が誰の手に成るかは明らかにされていない。日本文章学院は新潮社内にあったもので、編輯兼発行人佐藤義亮の名前で『近代文学講義録*****』などを刊行しているから、『文章日記』の揮毫依頼はおそらく新潮社の編集者か記者であったろうことは想定しうる。しかし＜解説＞が一方的に漱石の意向を無視して書かれるはずがない。常識的にみて揮毫した者の意図がそこに反映されているとみるべきではあるまいか。だとすれば、いままでの＜則天去私＞のイメージは大きな改変を強いられることになる。つまり、ひとつの仮定として、揮毫の際、漱石の口から＜解説＞に近いことばが語られ、しかも文章表現上の心がまえとして気楽に書かれたものであり、＜天は自然である、自然に従うて、私、即ち小主観小技巧を去れ＞という意味の教訓性にみちた要素が充分に考えられるということだ。私はもちろん、これからいくつかの資料の検討を通して展開するであろうように、＜文章＞の意味を狭義には考えないで広く文学表現の方法――小説の技法を含むものとして考えてゆくつもりであるが、それにしても冒頭から＜則天去私＞神話に水をぶっかけることになってしまった。しかしこのことを＜則天去私＞史でしっかりと押えておくとおかないとでは、いかに＜資料上の障害を打破して、則天去私という概念に託した漱石の真意の究明が必須であると同時に作品「明暗」の具体的分析と論者自身の人生観・文学観が根本から問われるべき問題である＞（相原和邦『『明暗』と則天去私*****』）としても、論点は大きく違ってくるであろう。

*早い時期、相馬御風の「『明暗』を読む」（大6・3「早稲田文学」）の中に、＜則天去私＞の揮毫が『文章日記』にあると書かれているが、資料的に詳細に検討を加えられたことはない。

**『日本の名著42・夏目漱石・森鷗外』（昭49・9・30　中央公論社）収載、二十三ページの写真。

***『朝日小辞典・夏目漱石』（昭52・6・15　朝日新聞社）中の〔則天去私〕の項。

****いま手元にある『近代文学講義録』の合本をみると、本科講義内容とその講師の顔ぶれは、「近代思想講話」（野上臼川）「自然主義講話」（生田長江）「明治文学講話」（相馬御風）「西洋文学講話」（昇曙夢・森田草平・相馬御風）「創作講話」（徳田秋聲）……ということで、発行は大体、大正四年から五年にかけてなされている。

*****『近代文学4・大正文学の諸相』（昭52・9・30　有斐閣）三十二ページ。

さて＜則天去私＞といえば、最晩年（大正五年）の木曜会と深い関係にあった。しかし、日記・書簡・メモ等を検討してみても、漱石側から木曜会席上での発言を伝えている資料はいまのところ何もない。もし推定できるとしたら、それは門下生達による回想類を頼りとするより他に方法はないといえる。

漱石は、十一月の木曜会の席で都合二回ほど＜則天去私＞のことを語ったとされている。第一回は十一月二日、第二回は最後の木曜会となった十一月十六日のことである。これは『文章日記』のために揮毫した時

期とほぼ一致している。二度語った根拠を推定できるのは次のような回想・談話類である。

A久米正雄「生活と芸術と（日記から）」（大5・12「文章倶楽部」、前出『人間雑話』収）

B森田草平「漱石先生と門下」（大6・1「太陽」、『夏目漱石』〈昭17・9・20　甲鳥書林〉収）

C赤木桁平「漱石先生の追憶」（大6・1「新小説」、『夏目漱石』〈大6・5・28　新潮社〉収）

D松岡譲「『明暗』の頃」（昭4・9　昭和三年版『漱石全集』月報〈岩波書店〉、『漱石先生』〈昭9・11・20　岩波書店〉）

E松岡譲「漱石山房の一夜――宗教的問答」（昭8・1「現代仏教」、前出『漱石先生』収）

F石原健生の談話（北山正迪「漱石漫歩――娘の目が潰れる話」（昭52・2「創文」）中で紹介）

この中で漱石の存命中に書かれたものは、ただA一篇のみである。それは文末に〈十一月十日、人に見せるために書く。〉とあることから判明する。まずそのことを確認しておきたい。日記はもちろんのことであるが、回想記や談話類は、余程の事情がないかぎり、或る事柄の発生から最も近い時点でなされたものを確実性の高いものとして考えたくなるのが人情であるが、その点からすると、松岡譲のものはやや信憑性に欠けるといえる。Fは例外として、ABCが漱石の死前後のものであるとすると、DEは、漱石死後かなりの歳月が経っており、客観的評価が積み重ねられつつあった時期になされたものである。回想はいきおいそういう評価を顧慮してアクセントが打たれて語られたりする。Eに関していえば、もしそれほど重要な回想であったなら、なぜもっと早い時点で記憶の鮮明なうちになされなかったのか、という素朴な疑念が湧くのだが、それはさておいても、一読してみれば判る通り、記述内容はそれまでの所説ないし木曜会での話がかなり意識的に取り込まれて集大成されている。その虚構性の根底には、発表誌や時代との関係もあって、松岡譲の宗教的な関心とそれに対する持続的な思索とが息づいている。その意味からすると、全集の月報のために気楽に書かれたDのほうが信頼できる。詳細は後述に俟つことにして、まず、漱石が〈則天去私〉を最初に口にしたと伝えられている十一月二日の木曜会の復元から始めることにしたい。

二日の夜、漱石山房に集まったのは、芥川龍之介・久米正雄・松岡譲・赤木桁平、そして名前不明の〈新顔の大学生らしい人〉の五人であった。久米は、Aの十一月二日の所に次のように書いている。

……八時を過ぎたので其足で漱石山房を訪ふことにする。柳町の停留所で偶然芥川と松岡とに会つた。「新思潮」が刷り上つたので、先生の処へ持つてゆく処だつた。（中略、原文改行）先生の処には赤木君ともう一人新顔の大学生らしい人がゐた。大家連は誰も来てゐなかつた。寂びしいやうな又親しみの多いやうな木曜日だつた。

「新思潮」とは一日付で刊行された第一巻第九号（十一月号）のことであろう。漱石に批評を仰ぐことのできた最後の号である。

帰途についたのは十一時半頃、まだ二十代半ばの若い門下生達だけによる物静かな集まりであったことが知れる。Dには〈其すぐ前（＊実は松岡の記憶違いで、最後の木曜会のあった十六日より二週間前、すなわち二日のことである）の木曜日は私達三四人の極めて淋しい夜だつた〉とあり、またEにも赤木桁平の名前は落ちているが、〈冷い雨がしと〳〵降つた。その雨のせゐか、いつになく木曜日の夜の漱石山房はものしづかだつた。客も珍らしく少かつた。芥川と久米と大学生が一人と、さうして私との四人だつた〉とあるから、久米の記述に間違いはないであろう。約三時間の木曜会の内容について久米は次のようにまとめている。

先生は例によつて色々話したが、最後に此頃の先生が悟入（厭な語彙だが）し得た宗教味を帯びた人生観に就て、真面目に話された。「私」のない芸術、箇を空うすることによつて全に達すると云ふ人生観、禅で所謂禅定、三昧の境地。先生の言葉は断片的であつたが、云はうとしてゐるものだけは朧ろげ乍ら解つた。（中略）先生の人生観が所謂禅味を帯びてる事は自分も認める。然し今日の言葉で禅の世界観と異なる所以も幾分か解つたやうな気がする。先生が其「悟り」を得たのは極く最近だと云ふ。而してまだそれを外部に説明するほどの余裕を得てゐないと云ふ。兎に角先生が宗教的に傾いて来た事は驚くべき事である。併し更に驚くべき事には、もう一二年後にはその世界観に基いた文学概論を大学で講義してもいいと云ふ意を洩らされた事である。（傍点引用者）

漱石の晩年に接した門下生のうち、久米・松岡・赤木・芥川らはほぼ二十五歳前後の青年達であり、三十台半ばの小宮豊隆・森田草平・安倍能成らとは世代的にもかなりの隔りがあった。師の漱石にしても、甘えであったとはいえいささか小うるさい古手の門下生達よりは、「新思潮」を中心に擡頭し始めたこれら若々しい文学者達に期待するところ大きかったと思われる。ただ、体得されたと伝えられる〈宗教味を帯びた人生観〉が、断片的であったこともあり、漱石の考えている通りに伝達されたかは疑問である。何も語らない芥川、漱石の死後、短期間で最初の総合的作家論『夏目漱石』を上梓し、こちこちの道学先生にまで祭り上げてしまった赤木、漱石の長女筆子と結婚し、のちに触れる「漱石山房の一夜――宗教的問答」（以下『漱石先生』収録の際に改題した「宗教的問答」とする）を書く松岡、そして当の久米、漱石山房に同席していた四人は、自分の人生観と文学観に則ってこの夜の体験をさまざまに感受した。久米に関していえば、〈あとの解らない処は先生と僕らとの間に横はる大きな年齢と気性の相異に帰する外はない〉と冷静に書きとめており、〈此の文章が要領を得ぬ独語に終つて、先生を誤り伝へる事を恐れてゐる。自分は只、思つた丈の事を書いたのだ〉という謙虚な配慮もまた信用されてよいであろう。彼はこれ以後、小宮豊隆や松岡譲のような〈則天去私〉の拡大解釈を試みてはいないが、この日記風の回想は、漱石がまだ存命中に書かれた唯一の資料であるという点で大きな意味を有していると考えられる。

ここで語られた問題点を要約すれば、漱石が最近〈箇を空うすること

によって全に達するといふ人生観∨つまり禅でいうなら∧所謂禅定、三昧の境地∨を体得し、その世界観を基盤に∧「私」のない芸術∨を今後の文学的実践活動と心懸け、できうれば自分の理想とするその文学論を体系化して一二年後に公けにしてみたい、ということであろう。ここには∧去私∨的姿勢による積極的な文学観の披瀝はあっても、普通いわれている∧則天∨ということの説明がないしまた不明確でもある。久米も書いているのだが、∧常にある純真な意味の人生の帰趨を得ようとして悶え乍らも静かに思索し、自ら体得して行かうとする態度∨は、漱石の文学的生涯を一貫しているもので殊更このときに強く印象されたというのでもあるまい。しかし若い久米正雄達にとって漱石という存在そのものが宗教的・人生的な先駆者としてたえず刺激的な何かを発散させていた。和辻哲郎のように∧漱石はその遺した全著作よりも大きい人物であつた∨（「漱石の人物」*）という同世代もいる。いきおい倫理的な印象に傾くのも頷ける。そうだとしても久米の回想から∧則天∨の実体や根拠を尋ね問うことはできないのである。彼はその語を使用していないし、仮に∧箇を空うすること∨が∧去私∨であるとしても、∧則天∨の∧天∨が具体的に何を意味しているのかは不明確である。第一、この夜漱石がその四文字を示したかどうかも判ってはいない。もし語ったなら当然書き残されておいてもよさそうなものだが、そうでないところをみると、∧則天去私∨の背後に∧自然に従うて、私、即ち小主観小技巧を去れ∨という文章作法――文学表現上の心懸けとしての意味を読み取ったほうが漱石の真意に近いといえるのではないだろうか。

尤も∧「私」のない芸術、箇を空うすることにつて全に達すると云ふ人生観∨にしたところで、語られたそれだけの意味としてなら殊更新しいことではないという考えも成り立つ。たとえば、徳田秋聲が、

芸術の天地は実行的なあらゆる小我を没した心境にある事は争へない。（中略）どうも実行上の小我念が出ては、深い人生の意義が現はせない。つまり人生の真相が暗まされ勝ちである。（談話「芸術と実行、其他」、明42・7「早稲田文学」）

というとき、漱石の目ざしたものと、秋聲の自然主義的な文学方法論とは、それほど逕庭のあるものとは思われないのである。漱石が語ったとされるものに深い意味があり、秋聲の談話に意味がないというのでは不公平である。多少違った位相から漱石のほうが秋聲の立場ににじり寄ったという見方も成立しないわけではない。「新小説」（大6・1）の漱石追悼号∧文豪夏目漱石∨に寄稿した何人かが、∧則天去私∨の真意を計りかねて揶揄的にみていたのも納得できないことではないといえよう

＊『埋もれた日本』（昭26・9・5　新潮社）一七九ページ。

＊

さて、私が注目したいもうひとりの出席者松岡譲はどのように受け止めたであろうか。久米正雄によれば、その夜、∧宗教に深く考ふる所あらうとしてゐる松岡は、色々と先生の言葉を追究して疑義を正した∨らしいことは確かだが、生まな形で記録を残してはいない。前述したように、DE共、かなりの歳月を閲しており、その点信憑性には欠けてい

る。この間、久米との確執、門弟間の対立など、漱石の没後をめぐるさまざまな問題の渦中にあって、敢えて沈黙を守ろうとした姿勢はその人柄から頷けないことはないが、『『明暗』の頃」にしても「宗教的問答」にしても、＜則天去私＞解釈に決定的意味を持つものではないと考えられる。研究者の中には後者を重視する人も多いが、久米や森田草平の回想を対置させてみるまでもなく、文章それ自体の中に矛盾や牽強付会が存在しているのを見落としている。

私見によれば、＜則天去私＞の神秘化、拡大解釈、吾が仏尊しとするあまりの神話化に最初に一役買ったのは松岡譲であった。松岡に限らず、多くの門弟達は、未完のまま残された『明暗』のどうにもやり切れない息の詰まるような世界――その極限的な世界の意味を解読せんがために、漱石が晩年に残した判じ物めいた＜則天去私＞という四文字の標語にすがる思いでさまざまな解釈を付与してきた。その点では誰が是で誰が否ということはない。ただ書き残された回想類に依るかぎり、松岡譲の果たした役割は、＜則天去私＞史において極めて大きいものがあったということだ。『『明暗』の頃」の中にも、久米正雄が書いているのに吻合する部分として漱石が＜近来しきりにもう一度講壇に立つて、新に自分の本当の文学論を講じて見たい気がすると言つて居られた＞という事実があったが、次に引用するのはそれに続く部分で、久米のものより具体的かつ詳細なものになっている。松岡は書いている。

言ふ迄もなく新に悟達された「則天去私」の文学観をのべようといふのであった。「則天去私」のお話は二度ばかりあつた。別に先生があのやうに急に逝かれようとも思はず、いづれ新しい大々的な組織理論の文学観が、何かの機会で纒めて聞ける事とばかり思つて居たので、私達は詳しく先生からそれを聞かずに了つた。が、一度誰やらがさういふ作品の例はとお尋ねした時に、『ヴイカー・オヴ・ウエークフイールド』とか『プライド・アンド・プレジュデイース』などをあげられた事を覚えてゐる。さうして其の意味は、「自然随順」とか、「自然法爾」とかいふ意味に似て居つたと思ふが、この短い当時の印象を心覚え風に書きとめる文章に、先生が一生をもつて達しられた人生観上芸術観上の極点を、いゝ頃加減に揣摩臆測する不謹慎はよさう。

久米が＜悟入＞と書いていたのが＜悟達＞となり、門下生達にとって漱石が到達した境地はあくまでも＜人生観上芸術観上の極点＞として把握されていたことを物語るが、それとて漱石の口からは断片的にしか語られず、具体例として挙げられたものから逆推するかぎりそれほど事新しい文学観の披瀝とは考えられない。文中の＜二度ばかり＞とは、前述の通り、この日と十六日の最後の木曜会のことを指していよう（九日については誰も回想していないところをみると開かれなかったと推定される）。ここで語られているかぎりでは、＜則天去私＞の文学観とは、東洋の言葉を借りて表現すれば＜自然随順＞とか＜自然法爾＞とかいう宗教味を帯びた人生的な悟達の態度に基づくものであり、外国作品を具体例にすると、ゴールドスミスの『ウェイクフィールドの牧師』やオースティンの『高慢と偏見』の創作方法に相当するということだ。この両者

がかけ離れたものであることはいまは問うまい。漱石自身、判りやすい卑近な例を用いて語っているのであろうし、しかも外部に語るにはまだ余裕を得ていないということであった。江藤淳が〈「則天去私」は漱石以外の人間にも分かち持たれ得べきものであって、オーステン及びゴールドスミスは「則天去私」の作家だったのである。要するに、「則天去私」とは、作品にあらわれた形ではオースティン及びゴールドスミス風の視点ということにすぎない*〉と論じたのも決して極論とはいえないであろう。松岡が断定的に「則天去私」の例話ととって重視しても、それだけの解釈を許容する曖昧さを『明暗』の頃」は含み込んでいる。いずれにせよ、ここで語られていることは、漱石が立ち向かっている積極的な文学論——創作方法の進展深化という課題であり（その背景として漱石の人生観上の深まりのあったことはもちろんだが）、それ以外の何ものでもなかったということだ。そして松岡が〈似て居つたと思ふ〉と断定を避けている〈自然随順〉〈自然法爾〉の意味も、〈天〉を漱石が〈自然〉のカテゴリーで捉えようとしていた『文章日記』の〈解説〉の延長線上で考えてみるかぎり、論理的には何ら不整合な点が生じてこないのである。むろん〈天〉に儒教的なイメージなど込めるべくもない。

ところが、約四年後に書かれた「宗教的問答」になると俄然様相が一変する。その変化について、松岡は文章の中でそれなりにつじつまを合わせて弁明している。或る講演会に出たときにその契機が作られたのだという。

……昨日まで自分はそれに気がつかず、人もみんな自分のやうな感じを一様にもつてるもの位に漠然と考へてゐて、自分が数の少い例外の位置に立つてる事をはつきり知らなかつたのだ。この偶然の小発見から、自分には極めて何でもないありふれた事ながら、こゝに朧気な記憶を辿つて、十七年前の一夜を物語つて見る気になつた。勿論記憶違ひもあらう、聞き洩らしもあらうし、又第一忘れてしまつた箇所も少くないであらう。しかし従来殆んど伝へられて居ない漱石のこの一面を、いさゝかでも伝へる事が出来れば私は満足だ。（傍点引用者）

この煙幕の張られた、見方によっては、選ばれた者の臭味さえ感じさせる前書きについては何もいうことができない。おそらくきっかけは外部にあったにしても、語りうるに相応しい内面的な成熟がなされていたからこそ、敢えて「宗教的問答」などと題して〈従来殆んど伝へられて居ない漱石〉の一面を強調してみたかったのではないかと推測される。久米も書いているように、その夜の漱石が例になく宗教味を強く帯びていたことは事実であったらしい。松岡はその現場の目撃者のひとりであった。久米によると、〈松岡は、色々と先生の言葉を追究して疑義を正した〉そうだから、「宗教的問答」のオリジナリティーはその点にこそあったというべきであろう。松岡に宗教的な関心があったならば、二十年近い昔の記憶とはいえ、〈問答〉の内容がかなり鮮明に脳裏に焼きついていたとしてもそれほど不思議なことではない。

しかしそうだとしても、二十六歳のとき聞いたことを四十三歳のときに書くことには、それ自体大いに問題がある。漱石の語ったことが久米や松岡の回想を通してしか理解できないことだとしても、語られた状況

によってその真偽について疑義をさしはさむことは何らさしつかえないことである。本来、表出された（しかもそれは断片的であったと久米は伝えている）抽象性の強い思想的・宗教的な言語が、人間の心に住みつき、時間の風化作用で増幅され、潤色や虚構を生み出してしまうことは充分に考えられることであるばかりでなく、また、筆者そのものの人生観が時代との相関関係で変化し推移することも考慮されなければならない要件だといえよう。岡崎義恵を始めとする多くの漱石学者がその点を黙過してしまったのは一体どういうことなのか。〈則天去私〉がア・プリオリなものとして絶対化されてしまっていたからではなかったか。思えば、松岡の回想から岡崎の研究にいたる時期は、一部のひとたちによる国民作家夏目漱石の神格化の道程とも重なっている。〈則天去私〉は時代精神のシンボルとして祭り上げられ手垢にまみれた。

松岡が「宗教的問答」を書いたとき、漱石の〈思想〉つまり〈則天去私〉は、ア・プリオリは与件として把握されていたに違いない。それゆえ彼はその〈思想〉を伝えようとして、漱石の〈言葉〉のみならずさまざまな〈言葉〉やエピソードを動員させたわけである。その証左として、〈先生の口調をそのまゝ写したのではなく、その思想の意味を主として誤なく伝へようとしたまでだ。一々の言葉がそのまゝ全部先生の言葉でないのはいふ迄もない〉（傍点引用者）という松岡自身の〈先生〉を敬愛するあまりの極端な謙譲の態度が逆に読者に押しつけがましさを感じさせるような断わり書きをみても判ることだ。ただ、「宗教的問答」がいままで無批判に重視されてきた背景として、それのみではない事情もいくつか考えられないわけではない。同席者のうち、すでに芥川龍之介亡き後、松岡のライバル久米正雄は通俗作家に転身し〈漱石山脈〉から脱落してしまっており、また赤木桁平は文芸批評の筆を捨てて実業界に入っていた。そうであれば、漱石の長女筆子と結婚した松岡の回想が信頼されざるをえなかったのも頷ける。昭和三年十一月に刊行された夏目鏡子述・松岡譲筆録『漱石の思ひ出』（改造社）の篤実な態度も信憑性を裏付けたといえばいえるだろう。しかし、記憶というものがまたいかに不正確かつ曖昧なものであるかということも忘れてはならないことである。回想が時間的な隔りをもってなされていればいるほど疑ってみることも必要であろう。まして〈思想の意味〉を強調したいという意図をもつならなおさらのことである。〈問ふ若者は求道者の熱にをのゝいて居る〉のに対して、〈答ふる主人はそれについて瞑想的な独白を続ける〉という問答形式が、はたしてどれだけの相互理解に到達していたか、そしてそれがそのまま恣意的な〈意味〉の付与や解釈を排除した純粋な再現であったのか、という問題は、「宗教的問答」を考える際に軽視することはできない。

松岡の回想は、たしかに漱石の晩年を解くための補助線のひとつとなりうる貴重な証言かもしれない。しかし、いままで縷々述べてきた通り、見方を変えると、求道者の熱におののいていた若者の体験が、不惑を越えて、漱石でいえば『それから』や『門』の書かれる年令に達したときに回想されたという、かなり一面的な視点をもったものでもある。そしてその内容は、それまでの所説や木曜会における晩年の漱石の

話をかなり総合化したものであるとの印象が強い。十六日の最後の木曜会でのことだが、松岡が不在であった（実は夜十時頃、芥川・久米・赤木と共に漱石宅を出ていた）ときに、漱石が語ったというめっかちになった娘の例話が、さも自分がそこに同席して聞いていたかのように記述されているなどその一例である。ただここでも〈則天去私〉は、一面において文学理論ないし創作方法としての性格を帯びたものとして把握されている。断片的に語ったにしては、いかにも理路整然としていて疑惑をさしはさみたい気持ちに大いに駆られるのだが、たとえば漱石はおおよそ次のように語ったということである。

——すると悟りといふのは、その本能の力を打ち敗かすことですか。

と誰かが尋ねた。

「さうではあるまい。それに順つて、それを自在にコントロールする事だろうな。そこにつまり修行がいるんだね。さういふ事といふものは一見逃避的に見えるものだが、其実人生に於ける一番高い態度だろうと思ふ。

——さうして先生はその態度を自分で体得されましたか。

「漸く自分も此頃一つのさういつた境地に出た。『則天去私』と自分ではよんで居るのだが、他の人がもつと外の言葉で言ひ現はしても居るだらう。つまり普通自分自分といふ所謂小我の私を去つて、もつと大きな謂はば普遍的な大我の令ずるまゝに自分をまかせるといつたやうな事なんだが、さう言葉で言つてしまつたんでは尽くせない気がする。その前に出ると、普通えらさうに見える一つの主張とか理想とか主義とかいふものも結局ちつぽけなもので、さうかといつて普通つまらないと見られてるものでも、それはそれとしての存在が与へられる。つまり観る方からいへば、すべてが一視同仁だ。差別無差別といふやうな事になるんだらうね。今度の『明暗』なんぞはさういふ態度で書いてゐるのだが、自分は近いうちにかういふ態度でもつて、新らしい本当の文学論を大学あたりで講じて見たい。（引用は『漱石先生』より）

松岡は漱石が語ったことを〈人生観上芸術観上の極点〉ととらえている。しかも〈則天去私〉を漱石のみが体得しえた未踏の境地と定位しようとしているかにみえる。『明暗』が近代文学史上極北の表現世界であることと、松岡が認識していることとは、いまのところ直接関係はない。何の批判的な視点を持たずに、〈則天去私〉という眼鏡を通して『明暗』の世界を切ってみせた論考がいかにつまらないものであるかは少し漱石研究史を調べてみればわかることだが、そのとき有力な証拠として提出されているのがかならずこの「宗教的問答」であるのはいうまでもない。

引用の部分を、先きに私が引いた「『明暗』の頃」と対比させてみるといくらかニュアンスが違ってきているのが判る。〈則天去私〉の意味を問われた漱石が、ちらっと例に挙げたといわれる〈自然随順〉〈自然法爾〉が、敷衍されて明確に大乗的見地から説明されている。おそらくこの転位に漱石よりも松岡自身の精神の位相をみたほうがより相応しいというべきかもしれない。

いずれにせよ、松岡の残した二つの回想の真偽については、さらに森田草平らの回想をぶつけて相対化しつつ、総合的な見地から検討を加えなければならないといえよう。それについては別稿を用意したい。

＊『夏目漱石』第一章「漱石神話と『則天去私』」。